

中田易直先生談「戦後の三井文庫と文部省史料館について」

二〇〇〇年一二月に、旧三井文庫譲渡とその資料の史料館への寄託前後の事情について、中田易直先生（中央大学名誉教授、三井文庫理事）にお話を伺う機会を三井文庫内でもった。先生のお話は、三井文庫の歴史にとどまらず、戦時期から戦後期にかけての歴史学界の側面や史料保存をめぐる動向についての貴重な証言となっており、三井文庫関係者以外の方々にも興味を持っていただけたらと思われるので、本誌上に掲載することにした。

史料館発足までのこと

由井 では、ざつくばらんにも、お話をお願いします。

中田 まあ一応お話した後、ご質問を承るようにして。三井文庫に関連のあることだけという訳にもいなくて、広くお話していきます。

私がちょうど大学を卒業したのが昭和一八年（一九四三）、井上光貞さんが一年上において、一年下に永原慶二さんとか山口啓二さんがいて、その谷間みたいな所で、（笑）余り研究者が出ていない学年ですけど、しかも二年半で、大学を追い出されてるんですよ。昭和一八年の九月末に卒業で、兵隊が一月一日入営というせわしい時なんです。

で、そういう訳だから、ちょうどその年の八月頃に「国史編修」というものを立ち上げるといふ企画がありました。

昭和初期に「国史館」の設置という計画がありました。これは、日本には国立の図書館があるし、博物館や美術館もあるが、また史料編纂所のようなものもあるけど、歴史博物館がないと。それで、黒板勝美先生がちょうど昭和四年（一九二九）に発議されて、二千六百年記念事業の一つとして考えられました。皇紀二千六百年が昭和十五年（一九四〇）なんですけどね、それを記念して国史館を作ろうとされます。で、国史館の、設立準備委員会のようなものを昭和四年に作られて、更に昭和一四年に造営委員会が出来るんですが、実は一八年（一九四三）になって廃止されて解散になるんです。これは黒板先生が急逝されてね、結局中心人物を失ってしまつて、その思い、黒板先生の国史博物館を作ろうという思いが、坂本太郎先生あたりに強く影響してましてね。で、今の「国立歴史民俗博物館」につながって行くんですが。その仮称で呼ばれていた頃、私が最初の準備段階で、昭和四六年（一九七一）に文化庁で予算化に協力したことがあります。

由井 文部省の……

中田 ええ。当初の考えは文化財関係の博物館の中心施設にしたいということで、初め計画されたんですけど、本格的に井上光貞さんが準備室に入つて来てから、研究機関に転換したんですよ。

由井 ああそうですか。

中田 ええ。だから博物館で研究機関なんですよね。今は大学共同利用機関になつていますが。そういう歴史博物館構想をもつ黒板先生の歴史館が挫折した時に、今度は六国史につぐ国史の編修を、まあ戦意高揚のためにやらなきゃいけないというんで、専任国史編修官が一人、うち四人が奏任官、事務官が一人、それから国史編修官補が五人、書記が四人という大きな構想で、昭和一八年（一九四三）から計画に入りましてね。ちょうどその時、私が卒業にあつたのもんですから、それではということ、どうせ兵隊に行つて何年先に帰つて来るかわからないというような見通し

でしたから、少なくとも今のうちに入っておきやあ、帰って来てからも勤めくらいはあるだろうくらいに思っていた訳です。お先まっくらでしたから。で、国史編修の準備態勢に入っていました。それは文部省の教学局に母体がありました。

由井 教学局？

中田 ええ、この局は、ちょうど「国民精神文化研究所」というものを所管しているんです。それから思想局、あ、思想課ですね。当時、学生の思想調査、思想統制をやってる課がありましたね。この国史編修院は、教学局第一課の教学課が所管していました。で、かなり教学課には歴史家がおりましたけどね、例えば国史概説編修部とか古典編修部とか大東亜史編纂部とかを含んでいました。不思議なことには、その教学局と東大の国史学科の平泉教授とはあまり仲が良くなかったんですよ。この頃は平泉先生の系統は、当時、文部省に入りたがる者はいなかったし、(笑) また文部省も採らないような状況ですよ。

由井 ああ、そうだったんですか。

中田 はい。ですから同じ傾向でも違うんですよ。平泉先生は陸軍に近いんですよ。教学局のほうは、先生の指導する東京帝国大学朱光会という学生の右翼団体を睨んでいる訳ですよ。それだけでなく、東大の先生方は一般論として文部省には批判的でしたよ。当時の教学局は、左右の極端な学生運動を排除していた時代でありましてね。これは、ちよつと余談でありますけれども。

この頃、陸軍のほうからですね、そんな一五年計画で長々としたことを考えてもしょうがないから、緊急に役に立つものを作れと言われて、それで「国史概説」というものを上下二冊作り、上巻だけは出て、下巻は終戦まで出なかったのですけれども、実は下巻も完成していましたけれども世間には出ていないというか、本は出来て献上本なんか配布さ

れてるんですけれども、販売はついにされないでしまっうんですね。だから古本屋なんかでよく上下揃ったものを見かけることがあります。

由井 「国史概説」ですか。

中田 ええ、「国史概説」っていうんですね。なかなか良く出来ててね、あの、上巻のほうが福尾猛市郎氏が下書きして、下巻は時野谷勝氏が下書きしていたんです。時野谷さんは戦後、大阪大学教授になられる方です。その頃、時野谷さんは維新史料編纂事業が終って、教学局に来ていたし、福尾さんは村岡典嗣氏の女婿でしたが、戦後、広島大学の教授になられた方ですが、当時、教学局に来ていたんですよ。で、この二人が書いたものを皆が寄ってたかって直すという方式で、その寄ってたかって直すといったって、大先生方で東北大学の教授、東大の教授、京都大学の教授、九州大学の教授あたりで、主任教授クラスの人々が、寄ってたかって手を入れるという訳です。更に教学局の役人や文部省の役人も手を加えたんですね。そしてあれが出来上がった。でも、やっぱり土台がしっかりしてますからね。今見ても下巻なんかは良く出来ていますよ。まあ、上巻の神話の部分は何と、あの時代の特色だから、如何ともしがたいですよ。

まあ、そういうようなことは軍から言ってきたことで、この国史編修の計画は教学局と関係の深い先生方によって進められて行きます。そして準備委員会、調査会というように次から次へと進められて、で、結局これ、貴族院の佐々木行忠副議長が総裁に、山田孝雄博士が神宮皇学館大学の学長から、国史編修院の院長になられるのです。で、その下に坂本太郎、森末義彰という先生が兼任編修官、東大と掛け持ちということ。それからさっきいった時野谷勝や福尾猛市郎。小島小五郎という方は広島大学で平安時代をやった方ですね。それから下村富士男。この方は外務省の外交史料の編纂に当たっていたですね。今の外交史料館ですかね。戦後、東大教授になられます。

由井 戦後活躍された下村富士男さんですね。

中田 などという人が編修官でいましたね。それで私らは編修官補要員で採られて、昭和二〇年二月に文部省国史編修官補になっています。私の前に京大出の服部貞蔵さんといって、後に三重大学に行かれた方だとか、同じく渡辺是さん、後に教科書の編纂のほうに入る人と、それから私よりおかれて東北大出の塩田嵩さん、鎮国あたりをやってる人が官補できました。この四人がまあ助手ですね。それに勅任編修官には丸山二郎さん（古代史）が予定されていましたし、新潟大学の森谷秀亮さん（近代史）とかも、この事業に参加されそうでしたね。そんなことが動いていました。

そして、昭和二〇年（一九四五）八月一日に終戦になって、その日に実は「国史編修院」が発足するんですよ。それは、もうそういう予定で予算が出来ていたんですよ。だから八月一六日に、山田孝雄先生揮毫になる「国史編修院」の看板を目黒大崎の国民精神文化研究所跡の正門に出して、正式に発足しましたね。私は八月一七日付で国史編修院国史編修官補の発令となっています。ところがもう九月二〇日頃になると、とても総司令部（GHQ）の占領の締め付けが強くて、もう歴史なんて、国史の編修なんていう事態でないことは、当の山田先生が初めから察知されていて、外国から指図されて国史の編纂をするのでは悔を千載に残すことになるといわれて、一月には辞職されるんですよ。

由井 そうなんですか。

中田 ええ。それでもう、後始末になるんですよ、実を言うと。私は、「国史編修院」で何をやったかというのと、陽明文庫の調査に行かせられたのと、あと京都大学で勸修寺文書の調査をやらされたんですね。まあ、旅費があったんでしょうね。（笑）使わなきゃいけなかったんでしょうか。実はそういうことで、「国史編修院」が駄目になりましたね。

これは一つの意図があつて、ちゃんと編修目的もあつて、六国史以後の正史の欠を補う、すなわち宇多天皇から明治天皇に至る歴史叙述に詳審を期すという計画も立って、「大日本史料」の完成を待つことはとても出来ないということからですね、発足した訳でした。翌昭和二十一年（一九四六）二月に、文部省に人文科学研究課が科学教育局の中に

出来まして、私は文部省科学官補に移されます。教学局がなくなるんですよ。教学局がなくなって社会教育局になりましたね。さて科学教育局はやがて茅誠司さんが局長で入って来るんですよ。後、東大の総長になられる方ですけれど。で、そこで私は何をやったのかというと、科学教育局は人文科学研究課と自然科学研究課に分れてるんですけどね、科学研究費の配分であるとか、それに人文科学研究費補助と少壮研究者の育成で、助手クラスや大学院の特別研究生クラスの若い学者に、昭和二二年度から研究費を出しています。それから科学研究奨励交付金といって、これは学校の先生方ですね。中学校の先生や、ここらで新制高校が出来てくるんですけど、その前は中学校、師範学校、青年学校の先生方の研究費ですね。それから試験研究費、民間研究機関の助成という仕事をしています。これは、徳川黎明会なんか、これを貰っていたんですけどね。それから山階鳥類研究所とか、労働科学研究所や大原社会問題研究所、三菱経済研究所とか、初めだいぶ多く貰っていましたよ。敗戦後はこの種の研究所が成り立たなくなっていたからでした。

由井 ああそうですか。

中田 ええ。

由井 黎明会はたくさん貰ったんですか。

中田 徳川黎明会は一番少なかったんですけどね。(笑) しかし今でも貰っています。今年あたりで止めになるんじゃないかな。

由井 ああそうですか。

中田 というような研究費行政ですね、それから、ここで学術史料の蒐集ということが、昭和二一年(一九四六)の秋ぐらいから、始まるんですよ。これが三井文庫にもろに影響があるんです。で、学術史料の蒐集ということは、予算

が必要です。実は国史編修院の予算が相当たくさんあったものですから、予算転換で歴史の研究所でも作ろうと思ったんです。そうしましたら、総司令部（GHQ）がいかと。そんな必要ないと。それから我々が知恵を絞って、我々だけじゃない、もう小野武夫先生だとか、野村兼太郎先生だとか、辻善之助先生、後藤守一先生らが時々来られるという具合で、社会経済史関係の先生が多かったですね。そういう先生方で相談してね、そして従来は、皇室中心の歴史だったけれど（「大日本史料」など）、庶民の歴史はほとんど調べられていない、この大切な史料が戦争中にすごいダメージを受けているし、戦後は社会変動でまたダメージを受けている。旧家は文書を屑屋に売っていると。で、これを止めなければならぬということだね、それで庶民史料の蒐集ということを学術史料と称したんですけどね。そうしたら総司令部（GHQ）は、それはよろしいと。大いにやれということ、総司令部（GHQ）が思う通りになって来た。当時はね、朝となく夕となく、提案が駄目だと却下されれば、また別の案を持って行き、伺いをたてるといった具合で、交渉は大変なことでした。

由井 ああそうだったですか。

中田 ええ、この頃はね、法令にしても国会へ出す諸法令類が全部そうでしたが、前もって関係省庁から総司令部（GHQ）に出かけ、朝晩検閲され、まあ、お伺いをたてて、OKが出るまで何度でも出向いて交渉させられたんです。で、とにかく歴史のほうは庶民史料ならよろしいとあって、あとはその中身までは追及しないんですね、庶民史料で津軽家文書を買おうとですね、（笑）蜂須賀家文書を買おうと、まあ、良かったんですよ。

由井 へえー。

中田 結局ね、さて散佚する史料があるといっても、いざとなるとすぐ右から左に、そう出て来るもんじゃないですね。九月頃予算が付いてね、その後一月までに買えって言われたってね、そう右から左にすぐ出て来るという訳に

はいかないんでね、ま、網を張っても。そうすると結局、手っ取り早いところで、所三男さんが尾張の徳川さんの林政史研究所にいたもんですから、協力していただいて、まずお近くの津軽さんあたりに当たっていただく、戦時中、空襲でお倉が半分焼けこげたりして困っておられるとか、越前の松平さんが越前史料を持て余しておられるとかね。そんなものも含めてね、とにかく蒐集し出したんですよ。

で、書類を蒐集したからには、その史料をどこに置くかということが問題になりました。また主に庶民史料ですから、第一に庄屋文書を集めようとしていました。史料館の蒐集目的には当初から庄屋文書を蒐集して、その比較研究をやろうとしていました。今の国文学研究資料館の史料館の本来の目的であるはずなんですけどね。当時、そういうことで庄屋文書を中心にして、文書を集めて行こうという方針で始めていました。

さて昭和二二年（一九四七）の秋頃ですかね。話を戻しますが、それまで集めた史料をどこに置くかという時に、ちようど岩井大慧さんが東洋文庫の文庫長をしておりますで、で、岩井さんが東洋文庫もまた持て余し気味だったんですけどね、じゃ俺のところの部屋を二つくらい貸してやると。そこに置けということで、東洋文庫に店を開いたのです。

由井 ああそうですか。

中田 ええ。で、誰が整理をやるかということ、これは野村先生のご意見で、所三男さんという人は史料を見つければ必ず掴んで来る人で、なかなか有能だぞと言っています。それで私が徳川義親さんのところへ貫いに行っただんです。そうしたら半分やるって言うんですよ。

由井 はあー、大雑把な話ですね。（笑）

中田 ええ。要するに、三日は徳川林政史のほうをやって、三日は文部省の学術史料を手伝ってくればね、こっちも助かるし半分でいいと言うんで、で、所さんと織茂さん、この方は後に蓬左文庫で名古屋へ行っただ人ですけど、織茂

さんと二人で、一人前にしてやると。あと、東京女子大の史学科を出た飯島さんや田久保さん。小西四郎さんがたまたま当時文部省にいたんで、小西さんの教え子が実践女子専門にいて、この中に後藤守一先生の推薦の浅井潤子さんとか一年おくれて鶴岡さんとか、大石夫人になる谷藤さんとかを紹介されて、まあ、ああいう方々が手伝ってくれました。それから沼田次郎さんが当時、追放になってたんですよ。戦時中憲兵であったとのこと。それで沼田さんは手が空いているということで手伝ってもらってたんですよ。それで、この連中に、あと文部省人文科学研究所の一人だったのが私です。当時、文部省には歴史出身の人が多かったですよ。まあ、豊田武さんが教科書にいましたし、教科書編纂官という方が他にまだいましたしね。丸山国男さんとか。それに文化財に斉藤忠さんとか田山方南さん。まあ、そういう連中がたくさんいたんですけれども。維新史料の残党では、小西さんとか小野さんとかね。

それから昔、ご存じでしょうけど、戦争中、日本諸学振興委員会（一九三六・九・八設置）というのがあって、自然科学をも含めた学問の振興を戦時中盛んにやっていたんですよ。これは昭和七、八年頃から始められていたでしょうかね。で、戦後人文科学委員会というものを立ち上げて、自然科学はまあそれなりに戦争中も研究が出来ていたようでしたけれども、人文・社会科学の研究は崩壊してしまった。とくに社会科学ですね。それで文・史・哲・法・経と五部門で委員会をつくり、それもこの人文科学研究所の所管でした、そういうことをやって、私はちょうど人文科学委員会のお世話とこの学術史料の蒐集をやっていたんですけれど。二年ほどやっている間に、ちょうど昭和二四年ですね、ま、そこまでが一区切り、前段階ですけれどね。大忙しでしたよ。

あのう、学術史料の蒐集については、結局、庶民史料と銘打った訳ですが、そんな高級な美術品のようなものではなく、主に庄屋文書を中心に村々の百姓文書が多かった訳です。どうしても、まあ、緊急に失われるおそれのある場合には、お公家さんのもの、例えば三条西家文書などというものにも手をつけてますし、それから津軽家文書とか蜂須賀家

文書とか、湯沢の佐竹家文書、そういうものにも手をつけていますけど、まあ、蒐集対象が次第に山村・農村・漁村を含み、広く網を張ってましたけど。こんなことをやっていてもしょうがないというので、全国的な史料調査を始めるんですよ。これが「近世庶民史料調査委員会」なんです。初代が小野武夫先生が委員長をやられて、学研時代の大きな組織ですけどね。学研の特別研究班です。翌年から科学研究費にかわって、総合研究になって、野村兼太郎先生が代ります。小野先生が亡くなられるんです、昭和二三年に。

由井 はあー、そうですね。

中田 ええ、昭和二三年から野村兼太郎先生が中心になって、で、高村象平さんと小池基之さんと私が幹事役で野村さんの周りでお金を出す（笑）仕事をやってた訳ですね。そういうことで、近世庶民史料調査委員会っていうのは、報告書を学振から三冊出しておりますけれども、この組織は全国的に網を張って約二〇〇人ほど若い研究者が手伝ってくれ、組織の底辺で実地調査に当たっていたのですね。のちにこの中から学者が多数生まれ来てたんですよ。あのう、津田秀夫さんなんかも、ここから出て来るんですね、平野の人口調査でね。それから林英夫さんあたりも愛知県の中島・丹羽両郡の調査で彼の研究が出来たし、金沢春友さんとか平沢清人さんとか民間研究者もね。まあ、ああいう連中がどんどん出て来たんです、この調査活動の中で。それは報告書の表を見ていただければ、関係した人は全部、わかります。この事業が地方史研究発達の発端になったと言つてよいと思えますね。で、社会経済史学会がこれを引っ張つたんです。当時の社会経済史学会というのは、会員は歴史畑が半分、経済史畑が半分と、半々くらいでしたよ。経営史学会を作る彦根の学会の時あたりでもそうでしたね。半々くらいでしたね。最近では、経済畑が増えて来て、歴史畑がいなくなつて来たんです。まあ、近現代史が増えたことにもよるんでしょうね。私にとっては淋しくなりました。そういうことです。

で、その時にですね、ここで記憶しておいていただきたいことは、昭和二二年に、蒐集史料が一万四八〇〇点ほど買っている。昭和二三年には二五件、二万二一〇〇点、昭和二四年には、というふうに史料が増えて行くんですけども、昭和二三年に、東洋文庫の部屋にはもう置場所がないということになってしまった。

由井 ああ、二万点でいっぱいになっちゃったんですか。

中田 ええ、東洋文庫二部屋ではね。置場所がないということで。置場所を探さなければいけないと。文部省の側から言えばですよ。犬丸さんという人文科学研究課長という方は、アララギ派の歌人で、戦前は四高の教授をやっていた法学士です、この方。法学部を出た文人なんですよ。

由井 何という人ですって？

中田 犬丸秀雄。この一族は宮内庁の総務部長なんかやってますしね、兄弟は、だいぶ活躍しています。犬丸さんの奥さんは、尾佐竹猛さんの娘です。もう文化的にレベルの高い、やや気の弱い人ですけどね。(笑) まあ、かなり高貴な……

由井 へえ、存じませんでした。アララギ派の歌人でねえ。

中田 ええ。で、犬丸さんが非常に熱心でね。で、この方が高村象平さんとか小松芳喬さんと同級生なんです。あの、開成中学で。

由井 へえ、あ、開成で。小松先生と一緒にだったんですか。

中田 ええ。それから高村先生と。

由井 あ、高村先生と。ほう。

文部省の史料館構想と三井文庫

中田 ええ。それでその連中、同級生なもんだから、しょっちゅう文部省に呼んで相談していたんで、あの辺が知恵の元でしょうか。

で、結局、何が始まったかっていうと、まあ先生方を集めて、いろいろ相談をしていたんですけれども、要するに予算を付け、日本でも正式に「史料館」を持たなきゃいけないということになって、昭和三年（一九四八）、渋沢敬三さんが大蔵大臣を辞められて、また民俗調査をやっていた時でしたけれども、渋沢さんのお骨折りで渋沢系の事務所ですね、野田卯一大蔵次官を呼んでくれて、で、犬丸さんと私が担当官として散佚に瀕する庶民史料の説明をやったんですが、それを野田さんが、事業の予算化に対し、よし付けようということになりました。

由井 予算を。

中田 もう局長も何もすつ飛ばししちゃって、文部次官もすつ飛ばして、緊急性ということですね、こういうことは役人のやるべきことではないのですよ。こうして学術史料、庶民史料の蒐集を推進した訳です。それで翌年、予算を付けるといふ、だいたい了解があつて、これから急ぎ「史料館」の上物探しになるんですよ。で、大蔵省の国有財産で適当なものがないかということになって、後楽園、今の賑やかなあの後楽園にね。あれは元、何でしょうね。煉瓦造で、ええっと、砲兵工廠があつたんですよ。

由井 ええ、昔、小石川に砲兵工廠が……

中田 ええ、あつたんですね。そのあと、それ使ったらどうだと大蔵省はいうので、ここは旧水戸の上屋敷の一部だそうですよ、煉瓦造のね、コの字型の物件で、しかしあまりにも汚くてね、ええ今遊園地になっていますが、当時、穴蔵のような施設でどうもあまり進まないで、で、次に千葉県の市川の国府台という所にグロートという考古学者の研究

所があつて、これももう止めるからというので、そこは課員の杉原莊介さんの案内で見に行ったり、それから、千葉市に国有財産が一〇〇〇坪ほどあつて、それも見に行ったりしていた時にですね、たまたま、私は三井文庫の山口さんとは研究上のことではないんですけど、息子さんのことで、ちょっといろいろ相談を受けていたことを思い出しました。

由井 それは山口栄蔵先生のことですか？

中田 栄蔵先生。ええ。それで前から知ってたんです。終戦前から良く存じあげていたんです。ご家族みんな知っていたんですよ。それで「三井文庫はどうだろう」と実は電話を入れてみたんです、この時。そうしたら「いや、そりゃ君、相談になるよ」と山口さんが言われたんですね。条件によっては話になるというご返事があつたんで、犬丸課長と早速、戸越の三井文庫に行きました。この山口さんは東大の経済学部を出て、上智だとか明治、法政の先生をしてましたね、非常勤講師で。商業史担当でした。当時は三井合名会社に属して三井文庫勤務でした。あとから三井不動産の嘱託で、三井文庫主任として管理する立場でした。会社が変わってますね。

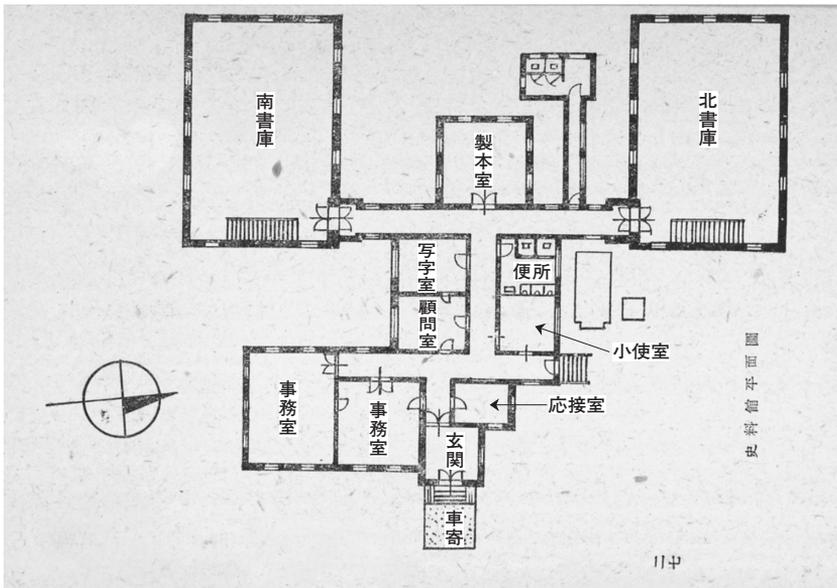
で、とにかく三井文庫へ行ってみたら、山口さんと中井さんとね、それから小使いさん、小使いさんで言っちゃいけないのかな、あの、ホントに昔の用人部屋があり、炉が中央にある小部屋で、炭でお湯をいつでもチンチン沸して、研究員が取りに来ればお湯を渡してやるというような、そういう部屋がありました。この頃の東洋文庫に良く似ているなあ、東洋文庫の裏の入口の所にね、同じような部屋がありましたよ。下の。昔はみんなそうなっていたんでしょうね。勝手口ですね、炉みたいなものがあつてね、お湯が常に沸いている。そこに人々が集まって来てダべる場でした。とにかく三井文庫には三人しかいませんでした。

由井 三人だけなんですか。

中田 ええ、ええ、あとはもうガランとして。で、なるほど、それはもう容易でなさそうだという具合でした。三井



戸越時代の三井文庫 右端は北書庫
 文部省大学学術局「学術史料の蒐集と保存」(昭和24年)より



同上 平面図

文庫はもう戦後の始末段階に入ってしまったから。それで、それじゃあいつべん当たってみて下さいっていうこと。結局、史料館がこの三人を引き継ぐという条件と、それから三井文庫の史料の寄託が条件でした。その当時、初めに話があったのは、物も安かったんですね、土地建物含めて一八〇〇万円、三カ年分割というような話から出発してですね、実はそのようにはいかないんですね。建物だけで八〇〇万ぐらいになりますから。まあ、そんなところから交渉が始まって、あとから、文部省と三井不動産との間で本格的な交渉が行われるということになります。

で、まあ、すでに昭和二三年（一九四八）から二四年にかけ、二三年の終り頃にはこの話がだいたいわかって来てたんですね、もう文部省の史料館の用地にすると、あれは理想的施設でした。もともとは相当坪数があつたけれども、三井家が荏原町に寄付して、それが一部、戸越公園とそれから小学校になるんですね。

由井 ああそうですか。

中田 土地をね。

由井 ああ、土地を。あ、元はもつと広がったんですか。

中田 ええ、八六〇〇坪ほどあつたんです。

由井 八六〇〇坪ね、なるほど。ああ、それでああなつたんですか、戸越公園に。

中田 ええ、戸越公園と、戸越小学校に寄付したんです。それが三〇〇〇坪です。あれが、三井家のやつぱり別荘でしょうかねえ、初めはねえ、いや別荘じゃない、本の置場ですね。初めから三井一族の本の置場として設定されていたんですね。だから変化しているんです。

まあ、そういうことで交渉が進められて行くところから、この三井文庫の話に入るんですけど。それで片一方では史料館設置請願書つてものが、歴史関係学者九五名によって作成され、衆議院議長幣原喜重郎宛に提出されて、そ

の説明を、当時の政権政党は自由党だったんですね、幹事長の佐藤栄作氏のところ、宇野さんが、宇野脩平が、良く知っているようで、一高の仲間か何かなんですわね。

由井 宇野さんが。

中田 あの方は一高なんですよ。

由井 退学になっちゃってるけどね。

中田 それで私が、担当官として一緒について来いと国会まで引つ張って行かれて、佐藤栄作さんに、そうですねえ、二〇分か三〇分ぐらい説明したんですねえ、目刳いて聴いていましたよ。(笑)

由井 聴いていましたか。

中田 まあ、よく理解したようでしたわね。

で、一方、大蔵省は予算を付けるという、両面作戦が非常に順調に進んで行った訳です。

えー、実は私は昭和二四年五月には、ちょうど私の恩師の中村孝也先生にそれとなく相談してて、私個人がこの史料館に深入りするべきか、深入りすべからざるか、ということだね。だから孝也先生も史料編纂所の経験があるから「君、史料の中にのめりこんじゃうと何もできないよ」と、(笑) まあ、そう言っちゃあ、やはりみなさんに悪いけど、そういうことで、「学校へ出る」ということで教育大の前身のほうへ出た訳です、私はね。それは五月のことなんです。新制大学の発足が五月なんです。昭和二四年(一九四九)の五月に新制大学が成立。教育大には、柴沼直という文部省の局長が天下って学長になって、その時に私も、のちの体育学部になるのですが、旧制の東京体育専門学校の教授で出たんです。で、それから史料館は専門員とかで関係していました。最初の年だけは学術奨励審議会の委員か何かでした。史料館の組織として評議員と専門員に分れていて、専門員は行動隊ですね、その中の一員としてお手伝いをして、

以後、責任の衝にはなかつたんですけれども。ま、そういうことであります。

で、史料館のことについては、「学術史料の蒐集と保存」（昭和二十四年）というパンフが、あそこで一番古いものですけれども、三井文庫の所在地は、東京都品川区豊町一丁目一一三八番地ですか。元細川家下屋敷の一部であること。寛文二年細川利重拝領のち幾度か所有者を変えて、明治三十六年にこの地を購入したのが三井家だと。で、始め戸越の別邸と称していたそうです。で、この構内に同族の古記録、文書類、図書書の保存と家史編集のために、大正五年（一九一六）から同一一年（一九二二）にかけて鉄筋コンクリート三階建て、書庫二棟、使途編纂事務所平屋建て一棟。（書類を示し）これ、なければそのうち一冊、予備があると思いますので差し上げて良いですけど。そういうことで、三井文庫の敷地がこのパンフに記録されています。戸越公園の隣だということが書いてあります。隣接して存在する戸越公園および戸越小学校の地です。

史料館の史料蒐集・保存と三井文庫寄託史料

昭和二三年九月に、一応史料館のほうで使い出すんですけれども、何かひとりで使い出していました。（笑）で、その時に、もうそこが史料館に決まっちゃう訳ですからね、誰もいないんですからね、それで史料を置く場所がないんですから、東洋文庫二部屋ではね。そこで、ここへ運び込み、だいたい三井家の史料は一つの書庫に固めていたと思いますよ。また、「近世庶民史料調査委員会」の事務局もここに置きました。

由井 空いているスペースがあった。

中田 ええ。それから洪沢さんの実業史博物館の史料がすぐやって来ましたが、やっぱり置場所がなかった。それに実業史博物館の「物」ですね、これは。物史料はいずれ後に民博の方へ行くんじゃないかな、あれは。

三井文庫は、先のパンフによれば、「三井家記録文書 約三万五〇〇〇冊」とありますね。「同上付属商業器具類 一四〇〇点 天秤、錢枴、千両箱、コイン型のような営業上に実用した器具類」とありますね。それから「貨幣標本 約五〇〇点 江戸両替店金銀包の標本および模造旧貨幣標本類」、それから「藩札・旧紙幣類 約五〇〇〇点 三井家蔵の松坂札・幕府札、太政官札など」その中には、田頭寅一という人の「旧蔵藩札収集品」。それから「長田家記録文書 二二〇冊、中井家記録文書 八八冊、富山家記録文書 約二〇〇冊、横田家記録文書 七三冊、平井家記録文書 約八〇冊、京都呉服十仲間記録 約一六〇冊、富士川交通史料 約七八〇点、天竜寺臨川寺文書 約三〇〇点、大蔵省記録写 三〇〇冊」。これは大蔵省の諸編纂の時の史料の写しですね、これも割と貴重なんですよ。それから「井上馨伝記史料 約八〇〇冊」と。それがほしいこの時に寄託されたものに入っていて、この三井家以外の史料は、逐次、文部省で買って行くんですね、当時、同族会のほうでも非常時でしたから、お金が要るようで、現金封鎖にあってますからね。それで、中井家文書や富山家文書も文部省で買った貴重史料でした。三井文庫に必要なものですがね。

由井 中井、富山。

中田 ええ、買っています。

そういうことで、実ははっきりしないまんま、三井文庫の史料は寄託となり、それから三井家個人のもの、例えば、北家とか新町家とか、個人の所有のものは史料館で預っているけれども、これは三井文庫のものとは違うというんで、一般には見せないものというところで、その辺は山口さんが適当に文部省の史料館の職員でありながら、三井家の番頭を相勤めた訳ですよ。(笑) 器用なことをやった訳です。だからこれは駄目だ、これは良いというのは、ちゃんと分類されてきました。置場所を少しは整理していただくでしょうね。私は最初、ちょっと調べさせていただいて諸法度集、すなわち延宝の店則がありますよね、あれなんかは北家の個人のもので、研究に使うことまかりならんというんですよ。

それで、しかしあれどうしても使いたいがと言うと、じゃあ今の言葉にして使ってよい、原文書の形を取らなければまあよろしいと言う。

由井 そんな解釈もあつたんですね。

中田 ええ、そういうことで使った訳です。私の著書『三井高利』の伝記の時にね、しかしあれはいけない、これはいけないと。まあ、いけないものが多かったですよ。そんなことがありました。三井各家個人の史料のリストなどはありませんでした。

そこで、いよいよその時のことでありますけど、だいたいどういうふうになって行ったかというところ、昭和二二年（一九四七）に、文部省が近世以降の文書の蒐集をやつて、東洋文庫の二部屋を借用して事業を始めるということになりましたね。で、昭和二四年（一九四九）に、あの、大学学術局長、劍木さんという方、後に九州から代議士になるのですが、この劍木局長宛に三井不動産の代表取締役の書簡によつてですね、三井文庫の建物譲渡について、条件などの通報がありました。昭和二四年（一九四九）年九月一日付です。もうこの時には私はいないんです、私は二四年五月に辞めて専門員になっています。ただし、最初からの関係者ですからだいたい知っておりますけど、所さんからも相談に与っていました。昭和二四年一〇月七日に建物購入の件で大蔵省から許可を取っております、なんか「八〇〇万円」とありますから、建物八〇〇万円で話がついてるんでしょうかね。一〇月一五日には文部省と三井不動産の売買契約が取り交わされて、一部の建物が貸借契約なども結ばれますね。二四年一〇月一七日には移転登記が行われているんですよ、史料館としてですね。ちょっとはつきりしない部分もありますね。昭和二五年一月二四日には、土地購入の件を大蔵大臣から許可を取っております、「三二八万三七六四円」とあります。何回かに分割して払つてるんですね、国がね。で、昭和二六年一月一〇日に文部省と三井不動産の間に、また売買契約が取り交わされていて、今度は土地でしょうね。

昭和二六年一月一二日に移転登記が終っています。

由井 二六年の登記ですか。

中田 二六年一月一二日に。土地ですね。その年の四月一日に山口栄蔵さんは文部事務官、中井信彦さんは調査員、これは文部省嘱託にあたるんですね、いわば文部省の処遇になっている。で、昭和三十一年（一九五六）一月一日付の「史料館寄託に関する覚書」という文書が、史料館長岡野澄と三井八郎右衛門さんの間で取り交わされています。それまで何も決めてなくてですね、結局、三井文庫の返却のこと、そろそろ寄託を止めようじゃないかと考えた時に、何もまだ決まっていってやつで、（笑）まあ、ここで始めて五年契約でやったのでしょうか。

由井 ああ、五年契約で。

中田 五年後に、じゃあ独立しようという三井文庫の話が出て来るのでしょうか？ 文部省は初めは三井文庫の諸史料が置場所がないので、あそこに置いてくれというのが一つの条件であったから、永久寄託のように考えていたようです。ちよつとこの辺からぎくしゃくしたようです。

とにかくその時の明細は、三井文庫の内容に関係しますから、先のパンフの三井家記録文書三万五〇〇〇冊の内訳明細に触れておきます。

あの、(1)三井家記録文書の明細は、次のようなことです。

- | | | | |
|----------|------|------|--------|
| ①三井家記録文書 | 目録一卷 | (本号) | 二五一九冊 |
| ②三井家記録文書 | 目録二卷 | (別号) | 二七八三冊 |
| ③三井家記録文書 | 目録三卷 | (統号) | 一一〇七〇冊 |
| ④三井家記録文書 | 目録四卷 | (追号) | 一一八五冊 |

| | | | |
|-----------|------|------|-------|
| ⑤ 三井家記録文書 | 目録五卷 | (同号) | 八二八冊 |
| ⑥ 三井家記録文書 | | (殊号) | 六五一冊 |
| ⑦ 三井家記録文書 | | (特号) | 一一九八冊 |

全部で二万〇二三四冊です。次に(2)三井家記録文書付属器物類 一四〇三点、(3)三井関係諸会社規則、社報、報告書類 一一四七冊、(4)古貨幣標本及紙札 六二二二点、(5)参考資料写真 一八六六枚、(6)参考錦絵、書画類 三六八点、(7)井上侯爵関係史料 一四一〇冊、七六二点、(8)参考図書 五七二四冊、とありますが、「うち八一二冊は戦後所収分」と書いてありますね。(9)官報(明治一六年〜昭和二年) 六三年分、と出てますね。

その他に「B. 三井文庫保管分、即ち三井各家、三井各社よりの預り分」ですが、(1)三井八郎右衛門寄託文書 一五二九冊、これは手がつけられなかった分ですね。(2)八郎右衛門寄託器物 八三点、(3)八郎右衛門寄託図書 六七二冊、(4)三井高長寄託文書 八三冊、(5)三井高遂寄託文書 一一九〇冊、(6)同上寄託器物 一〇二点、(7)同上寄託地図 四八五一点、(8)同上寄託法帖・印譜 一七一帖、(9)同上寄託図書 四〇二九冊、(10)三井高陽寄託文書 二冊、(11)三井高篤寄託文書・地図 七八〇点、(12)三井高周寄託文書 一三四冊、(13)三井高義寄託図書 五七一冊、(14)三井合名会社・三井総元方・三井本社書類 一五九五冊、(15)三井物産株式会社書類 一四五九冊、(16)三井鉱山株式会社書類 二七冊、(17)三井農林株式会社書類 八九冊、(18)三井家同族会事務書類 二箱(未整理)、(19)三井銀行書類 三七一冊、と一応まあその時に整理されてますね。

さて、「文部省史料館所在旧三井文庫所蔵及保管品明細」という記録で、一応整理されているものがあります。これは三井文庫にもあると思いますね。それから「三井文庫保管品のうち史料館へ売却せるものの明細」というものがあり

まして、三井高維蒐集史料、昭和二四年。これが一番早い処分ですね。三万円です。それから三井高大蒐集史料（長田家文書）ですね、これが二六年に八万円で売却されていますね。

由井 売却？

中田 売却です。

由井 それはこちらが売った？

中田 ええ。名義人個人の方がです。

由井 へえ、それは。何点ですって？

中田 ええ、全部で五点ありますね、三井高維蒐集文書ですね。今言った昭和二四年、それから二六年には例の三井高大蒐集史料で長田家文書ね。それから三番目は、さっき言った三井高遂文書（富士川交通史料外）と書いてありますね。それから四番目が富山家文書外で、昭和二七年、三井高遂さんが五万二〇〇〇円で売却していますね。それから五番目が聴冰閣（ていひょうかく）旧蔵文書、三井八郎右衛門さんと三井高遂さんが所有者で、これは一誠堂が仲介しています。昭和二八年、一七万円。全部合せて四万二〇〇〇円となっています。

他に例えば、史料館の奈良茂の神田安休文書なんかも三井家から来てますね。何に入っているものでしょうか。

由井 え？ 元禄時代の

中田 江戸材木問屋の奈良屋茂左衛門の記録。遺言状が中心で、神田家文書と言ってますが、それもやっぱり青色の帙の中に入ってるんですね。それから銀座の面白い史料なんかもあるけど、これはどこに属していたんでしょうかね。

三井文庫の再建

さて、新しく三井文庫を再建しようと考えてから、次の記録がありますね。重複がありますが、別の角度から説明しましょう。

昭和三八年（一九六三）には、三井家で史料館から三井文庫を取り戻そうということがはっきりして来ます。三井の関係事業が立ち直って来たことや、三井関係企業の精神的な抛り所としての三井文庫の必要性、それに史料館の管理が気に入らないことがあったのでしょうか。それで三井八郎右衛門さんが、昭和三六年（一九六一）一〇月二〇日付で、委任状を出していますね。「私は江戸英雄、田口純、内田正孝を代人と定め左の事項を委任します」といって、「当十一家より文部省史料館に寄託しある記録類その他の物件、三井各家その他より預託しある物件を含む、の返還に付き文部省と協議決定する件、前記に関し復代理人選定の件」というんですかね、十一家代表の三井八郎右衛門さんが委任しているんですよ。で、ここから返却の問題が起きるんですね、いろいろと交渉が。

昭和三八年二月に「旧三井文庫所蔵史料に関する件」という文書で、当時までの両者の関係・経緯および現在の状況、三井側の回答が記された文書がまとめられていますね。重複しますが、それによりますと、昭和二四年一〇月には、「三井文庫建物三二〇坪を八一〇万円にて史料館建物として購入」ですね。これはもういいですね。それから昭和二六年一月に「三井文庫敷地 約四四〇〇坪」とあります。

由井 この時、四四〇〇。

中田 ええ、「三五八万三〇〇〇円にて購入」と書いてありますね。この金額はおかしい。分割になっているのでしょうか。ついで「旧三井文庫職員山口栄蔵事務官」に、さっき言った通りですね、「中井信彦調査員」、これは囑託ですね、昭和三十一年一〇月、「史料寄託に関する覚書」というものをこれから取り交わすようですよ。それまで正式には

ないんですよ。このように総括していますね。

由井 はあー。

中田 大雑把なもんですよね、しかし、だいたいみんな預ったと、文部省では解釈していたでしょう。そしてここで、「三井家同族会より寄託期限満了後、旧三井文庫史料を引き取りたい旨、申し出があった」とあり、これが昭和三六年五月ですね。で、返還の方法についての話し合い、解決した事項、山口・中井の退職というような問題がついて、参考図書の分割についての話し合いのための整理というようなことが、こゝで行われているようですね。このことが昭和三六年六月より、三七年二月頃までかかっていますね。

で、この時の「文部省の返還条件」というものが出ていまして、「a. 法人組織にて公開を原則とする」。将来ですね。三井文庫が。「b. 該法人に本省側の希望する人を役員とする」。それから「c. 史料のうち、史料館の希望するものについては三井側においてマイクロフィルム（ネガ・ポジ）に撮影提供のこと」。これは私に選定の依頼があつて、基本的な史料を撮っています。それから「d. 参考図書については原則折半とする」と。

さて、史料館が三井文庫の主要史料をマイクロフィルムにして保存したいということは、将来、また三井文庫が史料を未公開にするんじゃないか、ということを心配した訳ですね。昔は厳しかったからですよ、三井の史料は全然見せなかつたんですからね。それから三井文庫の職員でも、沢田章さんなんかね、あの「西陣織屋仲間の研究」は、印刷して本がでたら急に刊行ストップをくつて、紙型まで取り上げて、三井文庫の書庫の中に置いてあつたんですよ。そういう具合でね、非常に厳しかったからでしょうか。

で、当時沢田章氏だとか柴謙太郎、それから斎藤隆三、偉い先生がいっぱいいましたね。それから遠藤佐々喜。などなど。僕はその辺のことは余り知らないけれど、戦後、遠藤さんのお宅に二度ほど伺ったことがあります。あの方は銀

座関係史料を持つておられましたね。

由井 ええ、ちよくちよく噂を聞きましたですよ、遠藤先生の話は。

中田 なんか史料館の奥のほうにお宅がありましたね。それで銀座関係の史料なんか、私、写させてもらったんですが。

で、史料館に保存する三井家史料の撮影費用は七〇〇万円程度を限度とされたようです。

で、三井側の回答ですがね、これ、今の条件に対して。「法人を新たに設立し、基本金一〇〇〇万円、他に書庫、研究室」と書いてありますから、整備するということです。実はマイクロ撮影機を文部省の史料館に提供して、そして移るまでに重要なものを撮れ、ということになってたんですね。とにかく、ちゃんと撮ってることは撮ってるし、目録も一組は文部省史料館に渡されて残っている筈。

鳴田 確かに史料はマイクロにしています。昭和三九年あたりでは毎日毎日撮っていました。

中田 うん、うん、撮ってましたね。

次に「史料寄託に関する覚書」というのがこの次に添付されていましてね。先に触れたことですが、「三井家所蔵の三井家記録文書を文部省史料館が受託するにあたり、寄託者代表三井八郎右衛門と受託者史料館長岡野澄」とありますが、この岡野さん、まだ健在なんですよ。だけでもちよつと史料館には力が入っていません。いろいろ事情があるのでしょうが。

由井 ああそうですか。

中田 ええ、あんまり記憶がないのですが、文部省がこういう仕事をやるべきでない、という正論が背景にありますね。岡野さんは西洋史を出た方ですけどね。まだ健在で。今「バラックの会」の中心の方で研究費行政に明るいです。

す。毎年僕らもメンバーに入っていますけどね。

由井 バロック、ですか？

中田 バラック。(笑) 文部省のバラックに事務局があつたんです。

由井 バロックじゃなくてバラック!。

中田 バラックって言ったじゃないですか。粗末な木造の臨時の建て物のこと。(笑)

で、覚書によると、「寄託者は寄託期間中、その寄託史料を受託者の承認を得て取り出すことが出来る。ただし、搬出より搬入までの費用およびその責任は寄託者において負担するものとする」。だからその移行過程ですね、昭和三年に約束しているんですけども、「別冊目録と現物との照合は受託時においてこれを行い、補正すべきは事後において補正するものとする。この覚書および別冊寄託史料目録は二通を作成して、各々その一通ずつを保有するものとする」ということで、昭和三年に三井八郎右衛門さんと岡野さんで、寄託者・受託者で、昭和三年一月一日付です。もうこの時には新規に三井文庫を作る考えが出来ていたんでしょうか。はっきりしませんが。

賀川 三一年ですかねえ？

中田 ええ。どうですか？ 早過ぎますか？

鳴田 早過ぎませんか？

中田 昭和三年一〇月。そうするとこれは別紙として付けたもんだから、前の書類に添付したものですかね、これ。昭和三年二月六日のこの「旧三井文庫所蔵史料に関する件」というものに付帯して、別紙として付けたものでしょうか。

鳴田 何か初めに寄託契約がなかったから、その時点になって初めて寄託契約を結んだ、ということですね。

中田 どうでしょうか。それをひつつけている訳ですね。

で、三井側では「マイクロフィルムの撮影機一台およびフィルムのネガならびにポジの調製に関連ある一切の費用を含めて総額七〇〇万円を負担する」。また「未刊稿本類および三井文庫において受託中のものはマイクロフィルムに撮らないものとする」。未刊稿本とは、例の旧三井文庫員の研究がいつばいありますよね、その大先生方の業績がたくさんありますよ、それは撮ってはいけない、公開しない。次に史料館が三井文庫の重要史料の「マイクロフィルムのネガならびにポジから複製・覆刻をしようとする時は、あらかじめ三井文庫の承諾を得ることを要する」と。要するにネガならびにポジから複製、覆刻する場合は、三井文庫の許可を得ると。これはやってませんし、今はもうこの複製は必要がないでしょう。どうなってるのか。遠藤さんっていったかしら、そうそう原島さんもいましたね。遠藤さんから原島さんに引き継がれているんですけども。旧三井文庫の目録なんか史料館で見ることなかったですね、どうなってるかな。三井文庫から一部史料館に来ているのが。今でも私にはわからないですね。それからフィルムは確かに撮ってあるけど、ほとんど使いません。結局、三井文庫の重要史料の複製保存くらいの意味は残っていますね。今日三井文庫がきちんと公開されていて、研究に供されているのですから問題が全くないですね。

さて、話が前後して申し訳ありませんが、昭和二四、二五年頃のことです。史料館・三井文庫関係のことで、早い時期のことですが、三井文庫関係のものが売り物に出されたんですよ。これは三井同族が当時の財閥解体のこともあって、財政的に問題があつて、三井文庫に寄託した三井十一家の共有の図書類を処分したいということが発生していました。ちよつと触れて置きたいと思います。それはね、三井十一家の代表三井高公さん宛に、持株会社整理委員会整理部第二課長藤木晃という方が、「昭和二四年一月一日付整二第八三五号」および「昭和二五年二月一日付整二第五九五号」で、「三井十一家共有にかかる三井文庫所蔵図書」の売却先として日本書誌学研究所、これがまあ通り道なんです

けどね。日本書誌学研究所代表者今井吉之助を指定しています。その中に、「ただし、実行に当たっては文部当局と緊密なる連絡を保つ必要があります。右指定について総司令部了解済」とあります。総司令部（GHQ）がもう了解してるんですね、これは。財閥解体は総司令部、一所懸命でしたからね。

由井 その日本書誌学研究所代表……

中田 今井吉之助。西郷さんと同じ名前だから。今井吉之助。尊経閣文庫長で、日本文化や古典を海外に紹介するような仕事をしていたようです。

それですね、実は周辺があわてるんです。処分するのは鵜軒文庫（土肥氏収集、和漢医書と詩文集とその他）、本居文庫、浅見倫太郎氏収集朝鮮本、これは朝鮮法制史料です。それから今関天膨菟集漢籍、明・清朝の刊本。次に三井宗辰氏菟集図書（江戸時代の写本を多数含む）とあります。

今井さんは、この三井家の貴重図書をパークレー図書館に全部引き取らせようとしていたようですが、一部極めて重要な史料の海外流出を憂え、文部省や関係学者が対策を検討したように聞いています。

由井 パークレーですか。

中田 そうパークレー、目録が出ましたよね。

由井 あそこ（三井文庫館長室）にあります。

中田 私も買いました。

それで、このことでやはり問題があつてね、本居宣長文庫は東大で買わせたいとかね。岩生成一先生がメモでこういうこと言ってるんです、ここで。「三井文庫所蔵の江戸時代以来の三井家に伝わる古文書の分量は非常に多いと思われる」。「図書館学を学んだ専門家によって分類目録を作成して出版する必要がある」と。「米国カルフォルニア大学のバ

「バークレー図書館員で二世婦人が来朝して視察して三井文庫文書を同大学に引き取ろうとの意思を表明」した。「そこで昭和二三年秋の頃かと思うが、文部省から電話があり、三井文庫関係文献の救済のため一〇〇万円支出してもよいと言って来た」と、そこで「同文庫に収蔵していた文書や文献の中から、三井家の親類で皮膚科の専門医土肥慶蔵、号鶯軒所蔵の古医書、雑誌類を東大図書館に」、それから「三井家と縁のある伊勢松阪の本居家古版本類を東大文学研究室に、漢詩文集類を国会図書館に」、その他医学関係をお茶の水の医科歯科大学に」引き取らせたいとされている。これは、どのような程度国内に史料が保存されたのか、必要なものの一部が配分されたのか。何を日本側で確保したのか、よくわかりません。それから三井家は「朝鮮古版本のコレクションも所蔵していたが、東洋文庫に異種のコレクションがあったので、これはバークレー図書館に譲った」と。「バークレー図書館のこの朝鮮古版本は欧米に他にないので非常に貴重視されているそうである」と。それから「その他の図書、雑本、雑誌類を悉くバークレー図書館に譲った」と。そして「目下、日本から専門家が招聘されてその整理に当たっているそうである」とされています。これは山口和雄先生も、ここところ興味持って行って調べて来ているはずですが、その時の話は私は聞いていません。

それから久松潜一と池田亀鑑両先生が調査されたものを昭和二五年六月一日付の書簡にしましてね、「本居文庫始末についての覚書」というのがありまして、「本居文庫蔵書中比較的重要ならずと認めらるるものは板本・活字本の類なるが、それらの中、(一)本居家の人々の自筆書人のあるもの、(二)筆者不明なるも書入あるもの、(三)稀覯雑誌は保存し置くべきものと認められる。以上の方針によって比較的重要ならずと認められるもの一七四三部なり。」但し著書稿本類中に含まれる板本類は、書入なきものも己に帙を作り整理されているように認められるので、一括保存した方が宜いかも知れずとしながらも、今は一応不要と認めて九四部にレ点を付してあるといった意見が出ているんですよ。これがどういふふう処理されたものか、私はわからないんですけどね。東大の国文科で調べてみるとよいですね。

是非追跡調査を。

由井 あ、これは是非ひとつでね。

ここに本居文庫があるはずだという問合せがあったりするんだそうです。

中田 ああなるほど。それはいいです、東大の国文にあるのでないでしょうか。

由井 はあ、だから、今度は今の話で、東大の国文科のほうにあると思う、と答えてもいいわけですね。

中田 そうですね。パークレー図書館も調べる必要がありますね。

嶋田 岩生先生が生きていらつしやる時に理事会の席で、私が努力して一〇〇万円で鵜軒やら本居から日本に残すものを選んで、とおっしゃってました。私の努力があつてこれが日本に残りました、というふうには。

中田 そうでしょ、私もそのように聞いています。パークレーがみんな引き取ってもよいと言っていたんですから。それで岩生先生らが色々心配されたんですよ。どう処理されたかは、先生方の手に移ってしまった訳ですから、よくわかりません。

それからこれが当時の初期の史料館人事の綴じ込みなんですけども……。〔書類を繰りながら〕えー、山口さんの履歴書が出て来たなあ。……野村兼太郎、これ自筆の履歴書ですね。

由井 野村先生は、すごく几帳面な方ですねえ。

中田 昭和二四年。これ野村先生の字ですよ。

由井 あの先生、いつも羽織袴でいたりしてねえ、授業する時。ものすごく厳しくて、みんな恐れをなしていると聞いたことがあります。

中田 あもう、先生のお宅の応接間に入ると、お部屋の回りに古文書が積上げてあつて。

由井 そうそう、それで羽織袴で出て来られると、みんな庄倒されちゃうんです。
中田 そういう人でしたね。

「稿本三井家史料」その他のこと

由井 じゃあ先生、ついでに「稿本三井家史料」のことも、先生の写した話などもお話しいただいて。

中田 「稿本三井家史料」は非常に役立つ史料で、少なくとも三井文庫のあの大家たちがね、書いて。あれは何部作
ったんですかね。五〇部くらい作ってますかね。

由井 それもよく判んないんですけどね。そんなに作ってないですね。

中田 同族に分けて、あと若干。

由井 二〇部なんて聞いたことがありますよ。

中田 そんなもんでしょうか。だから若干は残っていたんですよ。この「稿本三井家史料」が、戦後、東大に入った
んですよ。戦後、同族のどこかが処分して。

由井 昭和三〇年頃の話ですよ。

中田 それからいま一つが学習院大に入ったんですよ、経済学部。いま一つは雄松堂に入って、マイクロ化して、
要らなくなったものを中央大学の私の所へ持って来たのです。それを一八〇万ほど買ったんです。

由井 それからその一橋大にあるのは。

中田 その後ですね。僕は三つの大学が持っているのは知っていました。

由井 で、先生はいつからあれをお写しに。

中田 中央大学では私の部屋にずっと置いてあったんです。それで、辞めるちょっと前に、これがないと研究上不便ですから、定年になるちょっと前に、コピー機を二台レンタルしてね、(笑)一斉に必要なものをとったんです。

由井 ご自分で書いたものいっぱいあったじゃないですか。

中田 ええ。

由井 同時に研究をされてた訳ですね。

中田 研究はしてました。で、私がやる時に図書館の準貴重書本に置いて来たんです。大切にしています。

江戸時代には「大日本史料」のようなものがないですからね、東大史料編纂所に「史料稿本」はあるけれど、昔は簡単に利用出来ない。編年的なものが揃めないんですね。それで「東京市史稿」の産業編と市街編はまあまあですけどねえ、三井家のは家別で全部編年体ですからねえ。それから優れて経済面で重要な項目が多いですからね。そういう意味で広く江戸時代全体にわたって便利ですよ。それからやっぱり呉服事業史料もさることながら、金融関係、貨幣、公金為替、まあそれは賀川さんのほうが今ではお詳しいけれども。そういうようなもの、それから、松坂の羽書にしてもね、結構大事な史料がみんな入ってますよ。あれにね。それで、貨幣、金融の他にも、経済一般や長崎貿易も入ってますしね。長崎貿易では、住友もやるし、鴻池もやるし、みんな豪商は長崎商売やってるんですね。ま、そういうことで、非常に重要で、安直に見られるもんですから、重宝ですよ。それからもちろん家憲、家法、店則類ね、それからいろんな店内の取り決めね、実に三井は詳しいじゃないですか。でそういうものがほとんど全部、稿本に入ってるのと、経営や事業の推移が見られるのと、それから小野田とか特別に他所から合流している店のことが連家史料に入ってる。

由井 あれについて何か聞いたことございますか、その、これをまとめた明治大正時代の人達のご苦労というのが…。

中田 いやあ、大変なご苦労だったでしょうね。

由井 比較的短期間に、大勢、人が関わってますね、相当の大勢の人が。

中田 ええ、それと指導者がしっかりしてましたねえ。だからその斎藤隆三先生にしてもねえ、呉服事業を中心に研究したでしょ。遠藤先生が貨幣関係をやってるんですよ。

由井 なるほど斎藤先生が……

中田 ええ呉服史料。

由井 で遠藤佐々喜さんはどちらかというと、為替金融……

中田 両替屋。

由井 両替の方をやって、はあ。

中田 それから柴謙太郎氏は何をやったんだろうなあ、研究の成果はいっぱい三井文庫に残ってるはずですよ、冊子になって。それは見られないんですよ。それから沢田章氏ね。沢田先生は、具合悪くなったことはふれましたが、三井文庫の史料で研究書を出版しちゃったんで、差し止められて、没になったんですよ。戦後にまた出版しましたがね。厳しかったんですよ。

由井 厳しかったですね。その話はうんと聞きました。

中田 だいたい、戦前はほとんど研究出来なかったんですよ。

由井 外に発表出来なかった。だから土屋先生もそれをすごく気にしていました。遠藤先生の仕事すら大問題になった。だから自分たちはしても書けなかった。

中田 それで戦後ですよね。

由井 戦後ですよね。

中田 ええ、そういうものが外部へ出て来たことと、文部省史料館に寄託するようになって、旧三井文庫については閲覧させるが、それから三井家個人の所有のもの、北家とか南家とか、そういう個人の持つてるものは見せない。これが最近、三井文庫に寄贈されて来ているでしょう。これからは閲覧できますね。当時は個人の管理下にあったから。それを使い分けたのは山口さん。嚴重に番頭役をしていました。

由井 は？

中田 番頭さんと事務官、(笑) 両方使い分けした。

嶋田 事務官のほうはもうすっかり……。 (笑)

中田 だからあいつはやなやつだと、時々ケンカもしてたし……

由井 は？

中田 いや、所さんとね、山口さんとね、

由井 ケンカしてたんですか。

中田 たまにはね。意見がありませんでした。

由井 私はしょっちゅう二人並べて聞いたから、仲良かったのかと思つた。(笑)

中田 いやいややそうでもないです。中井さんは何のことはない、飄々として、その頃は新進気鋭だったから。

そんなことで、私は「稿本三井家史料」は、非常にいいもんだし、もし再版するならあんまり手を入れないで刊行するとよい。手を入れたらきりが無いんでね。手を入れず、あのままの形のものね、今三井家の許可を取って公にすることであることであらね。あれはマイクロフィルムで見つたて、要領得ませんよ。部分的なことでマイクロを見ることはよいが、全般に史料を探す時など、刊本の方がよいですね。もし再版するとしたらなるべく現状を尊重して、巻末に正

誤的な訂正をするというのはどうでしょうか。当時の大先生の力量をそのままにして置いてね、特にいけない所だけ、正誤で訂正するとしてはどうでしょう。本体をいじると頁数が移動することになり、文献引用が旧・新で変化し、混乱しますよ。私が手伝った中村孝也先生の「徳川家康文書の研究」は初版と再版で頁が全面的に動いてしまって、今、引用に困っています。

賀川 全部を点検するという前提に立つと、もうなかなか出来ないですね。

中田 それはもうとても出来ないですよ。

益田孝の伝記なんてのは中村孝也先生が委嘱されて、東大で……

由井 あれもとても欲しがられましたけど。

中田 出ないでしょ、あれは稿本だけです。戦争中、あれ、中村先生は苦勞して疎開していましたよ。

由井 ああそうですね、あれは無くて本当に困ったことがありましたよ。あれは本当に見たい人多くてね。

中田 そうでしょうね。ここに一部あるはずですよ。あるでしょ？ 益田孝の製本した二冊本。あと一部は私のところに来てます。

それから「高蔭日記」と「嘉粟全集」が出てるんですよ、それから番外編には「呉服事業制度史料」、それから系図類が二冊ほど別に出ています。まあ、系図はねえ？ 遠祖史料といっしょに合わせてね。

由井 遠祖は神代の話ですからねえ。

中田 ええ、ちよつとあれをあのままにしちゃうとね、神話時代に入っちゃうから。

由井 神代の話ですね。

中田 ええ。それから「町人考見録」なんかも一つ出ています。あれも稿本の中に入っていないですよ。昔オーストラ

リアのクローカさんが「町人考見録」の研究していましたね。

由井 入ってなかったですか。

中田 別になってるんです。「町人考見録」は異本が多いですが、三井文庫で印刷したものは極めて良質です。「高蔭日記」「嘉栗全集」なんていうのはね、あれなんかは国文畑のほうに役に立ちますね。……嘉栗さんののは、私、よく見たことないんですけど。何か本が出てますよね、『嘉栗研究』、薄い本がね、ここにもあるでしょ。浄瑠璃作者・狂歌作者で、作品がこの全集に収録されていますよ。それから三井家のあの「家憲」は、どっかアメリカですかイギリスですか、「House of MITSUI」が刊行され、「家憲」の写真が出てるんだそうですね、現物。それで総司令部（GHQ）が来た時にね、現物を出させて言われて、山口さんがもう失くなったって言って断っているんで、占領中は失くなっていた訳です。

由井 ああそうですか。

中田 見られてないんです。総司令部が直接三井文庫に来てるんですよ。それはまだこちらに来る前の話でしたけどね。山口さんから聞いたことです。

別のことですが、あの三井家両替為替業史「大阪金銀米銭并為替日日相場表」が再版されていれば、もうちょっと研究が進みそうな感じがしますけどねえ。あれどうですか。あれを簡略にしたのが、中井さんがやった薄いもの、『近世後期における主要物価の動態』三井文庫編が出てるでしょ。元の形のを刊行したほうが研究者には使えると思うんですよ、昔中大商学研究科の院生の渡辺正彦君がかなり手をつけて、なかなかしっかりした研究してました。二つほど論文を出してるんですよ。

由井 ああそうですか。

中田 何かご質問があれば。

蚕ノ社のことですが、京都のね。あれは三井家の関係の深い社です。どうもあそこは神主さんがいなくて、神主さんがどこにいったかと下鴨の宮司さんに聞いたりして、そうしたら都ホテルの経理部長かなんかやってて。(笑) だから、休みの日でなきや神主さんがいないんですよ。(笑)

賀川 服部さんですね。

中田 三、四年前の話ですが、要領得なくて。

由井 そういえば先生、ほら、本居文庫とこれとの関連を一寸お話になって。

中田 うん？

由井 本居文庫と、もともとこっちで本居文庫を…どこから手に入れたんでしたっけ。何かチラッとおっしゃった、本居文庫と三井家との関係……

中田 本居文庫はもともと三井家のどこかの家で持っていましたね。

由井 松坂家で持ってたっていう訳でもない？

中田 ええ、松坂で本居家と三井家は親しかったようですよ。

由井 ええ親しかった。

鳴田 大平の関係。

中田 そうですそうですね、大平の。高蔭なんて宣長のパトロンですよ。

由井 パトロンですか。日記読んでもそれが良くわかりますか。

中田 わかります。

由井　じゃあ、どうも大変ありがとうございました。本日は有意義なお話を伺うことができよかったです。どうもどうもありがとうございました。

中田　大体一通り知っていたただけでも……。 (笑) ありがとうございました。

二〇〇〇年二月二日　於三井文庫